

<研究ノート>

外国人スポーツ留学生を対象とした日本語授業の一考察 —専門語彙リスト作成とタスクを取り入れた実践—

渡辺 史央¹

近年、スポーツのグローバル化に伴い、海外から日本にスポーツを目的に留学する外国人留学生が増加傾向にある。しかし、彼らへの日本語教育や言語支援についての具体的な実践研究はこれまでほばなされていないのが現状である。本研究は、外国人スポーツ留学生の日本語支援の一環となる教材開発や教育実践に向けた研究ノートである。授業において、ラグビー情報誌からの英語とトンガ語の語彙リストの作成を学習者主体の活動として行った。考察の結果、英語からの借用語以外に、スポーツ全般に共通する語、一般的な意味とは異なる使い方や競技特有の状況や文脈における使われ方をする語などがあり、今後の専門日本語教育の実践において留意すべき点が明らかになった。さらに、授業におけるタスク活動の取り組みを紹介し、スポーツを目的とする留学生の日本語クラスでは、学習者ニーズを特定化することの重要性に加え、TBLT 理論に基づくタスク・ベースの授業実践が有効であることを示唆した。

キーワード：外国人スポーツ留学生、専門日本語、ラグビー分野語彙、タスク・ベースの教授法

1. はじめに：研究の背景と問題提起

本稿ではまず、外国人スポーツ留学生をめぐる状況と課題について述べ、本研究を始めるにあたっての問題提起をする。

1.1 外国人スポーツ留学生をめぐる状況

スポーツのグローバル化が進展し、海外から日本へと競技目的に留学するいわゆるスポーツ留学生が増加傾向にある。スポーツ留学生は、「スポーツ選手としての留学、または競技力向上や、そのための練習活動を行うことを主目的として、日本に滞在している外国籍留学生」と定義される(松元・高橋 2009)。本稿では、日本人のスポーツ留学生と区別するため、松元・高橋のいうスポーツ留学生を「外国人スポーツ留学生」と呼ぶことにする。

外国人スポーツ留学生の増加の背景には、1960年代にアメリカに端を発したスポーツ留学生制度が1990年代に日本に波及、発展していくなかで、とくにフィジカル面での強みを持つ外国人を日本の高校、大学においてスポーツ強化の方策として受け入れてきたことがある。本学においては、2016年度より外国人スポーツ留学生の受け入れ

が本格化し、2021年10月現在、8名(バスケットボール2名、ラグビー6名)の選手が在籍している。スポーツ留学の制度は、現在では高校・大学・社会人の所属チームやさらにはナショナルチームの強化にもつながる大きな役割を果たしている(石井 2020)。

しかし、外国人選手の活躍が社会的に注目を浴びる一方で、外国人スポーツ留学生への言語支援を含めた受け入れ体制や支援のあり方の問題も指摘されている(池田 2019; 松元・高橋 2009; 三代 2014a; 三代 2014b)。2018年に起こった高校バスケットボールの試合における外国人スポーツ留学生による審判強打事件¹⁾に象徴されるように、外国人スポーツ留学生への言語支援は、その競技人生を左右することもあり、とくに来日後の日本語支援は重要な課題である。

さらに大学における外国人スポーツ留学生への日本語を含めた学修支援は、大学スポーツの「競技と大学生活の両立」という大きなテーマに根差す部分もあり²⁾、その支援体制の整備のほか、留学生の学修への動機づけや学習時間の確保が課題となっている。とくに、外国人スポーツ留学生の一日の学習時間は、他の一般的な外国人留学生と比べてもはるかに少ないことがわかっている(松

¹ 京都産業大学 外国語学部

元・高橋 2009)。

1.2 アカデミックな目的による留学との違いから生じる課題

アカデミックな目的による留学生に対する日本語教育の整備と学際的な研究は、日本政府の「留学生受け入れ 10 万人計画」や「留学生受け入れ 30 万人計画」のもと、種々の受け入れ体制の整備が大々的に施され、それに応じる形で発展してきた。大学で学ぶ留学生の日本語学習の目的は、専門教育への橋渡しとなるアカデミックな日本語力の習得とあわせ、将来のキャリア支援につながる日本語力の養成であり、本学においても、外国人留学生（正規留学生）への日本語教育は、学術的な活動で必要となるアカデミックジャパニーズと社会に出てから求められるビジネス日本語の習得を主体としたカリキュラムで設計されている。

しかし、スポーツ留学を目的とする外国人留学生に対する日本語教育については、上述の通りその受け入れの歴史が比較的浅いことや対象人口が少ないこと、さらに一般的な留学とその主たる目的が大きく異なっていることから日本語教育の分野においても研究対象として取り上げられることが極めて少なく、大学において提供すべき学修支援やキャリア支援につながる日本語教育とは何かについても指針となる先行研究や事例がない。

さらに、留学目的の相違から生じるもう一つの課題に「日本語学習への動機づけ」の問題がある。三代 (2014a) が指摘しているように、高校から日本留学を継続している外国人スポーツ留学生の場合、部活を中心とした生活のなかで、競技をするために必要な日本語や寮生活やチームメートとのコミュニケーションを取るための日本語をすでに身につけており、彼らの最大の目的であるスポーツという「コミュニティへの参加」に必要な日本語の習得が達成されていることがある。仮に「学習言語」としての日本語が不十分であっても、「何のために何を学ぶのか」が明確でかつ彼らのニーズに即したものでないと、日本語学習への動機づけが難しく学習意欲が継続しないことがある。

1.3 「特定のニーズ」の課題—目的別日本語教育・専門日本語教育の視点から—

JSP (Japanese for Specific Purposes : 特定目的の日本語、以下 JSP) の分野では、日本語学習者の多様化が顕著になる 1990 年代以降、多様な分野における日本語の研究が盛んに行われるようになった。佐野 (2009) は、JSP を「明確な特定

のニーズに基づく日本語教育」とし、「一般日本語教育」、JGP (Japanese for General Purposes、以下 JGP) との違いについて、「限定的な目的とそれが要求するアプローチにある」と述べている。JSP における特定のニーズの例として、電子工学分野の論文を読む技能、文化人類学研究の一環として北海道の漁師にインタビューを行う技能、小学校からのお知らせを理解する技能、機内サービスや介護現場での日本語運用技能といったものがそれに相当するとしている。

近年では、2005 年に学会として設立した専門日本語教育学会において、分野横断的な日本語・日本語教育研究が数多くなされている。当学会の前身である研究会当時の 1990 年代から辿れば、理工系留学生のための専門用語 (専門日本語) の研究を筆頭に、社会科学系留学生のための日本語、最近では、介護・看護分野、外国人家事支援人材、技能実習生のための日本語と、その研究分野の裾野は広がりつつある。しかし、外国人スポーツ留学生のための日本語を扱った研究は管見の限りではなく、日本語における「特定のニーズ」についても明らかではない。

1.4 問題提起および本実践研究の目的と方向性

上記にみたように、外国人スポーツ留学生への日本語教育の整備と学際的な研究は、その必要性が指摘されながらもこれまでほとんどなされてこなかったのが実状である。筆者はこのことを強く認識し、外国人スポーツ留学生に対する JSP および専門日本語教育 (以下、専門日本語教育) 研究の必要性を主張したい。とくに、言語支援と学修支援につながる教材開発は重要である。そこで、本研究では、今後の教材開発研究の準備として、外国人スポーツ留学生にとって必要な日本語とは何なのか、どのような教育的アプローチが適切なのかを探るべく、以下のことを目的にした。

- ① スポーツ分野 (ラグビー) にある語彙にはどのようなものがあるのかを俯瞰的に捉え、言語的特徴についてみる。
- ② 外国人スポーツ留学生にとって重要度の高い専門語彙にはどのようなものがあるのかを探る。
- ③ 学習者中心の活動を軸とした授業が、外国人スポーツ留学生の日本語学習にどのように有効かをみる。

具体的には、本学に所属する外国人スポーツ留学生の部活動の競技であるラグビーに焦点を当て、ラグビー情報誌を題材とした語彙リスト作成から明らかになったスポーツ分野の語彙の言語的特徴と今後の専門日本語教育への応用について示

唆する。そして、さらにタスク・ベースの指導法の理論を概観した上で、外国人スポーツ留学生の日本語クラスにおい試行的に行ったタスクを取り入れた授業活動を検証し、教材開発や外国人スポーツ留学生への教育アプローチについてこれらが有効であることを提言する。

2. 調査方法

ここでは、専門語彙リスト作成活動を通して行ったラグビーに関する語彙の調査について述べる。

2.1 語彙調査の有用性

中川 (2019) の調査によると、専門日本語教育学会発行の学会誌『専門日本語教育研究』における過去の投稿論文 (研究論文・報告) 計 106 本 (1 本に複数の内容を扱うものを含めた延べ数) のうち、「調査 (言語)」、つまり、特定の分野で扱われている日本語に関する調査がもっとも多く全体の 3 ~ 4 割を占め、投稿論文の軸となっている。これは、新しい分野における研究の足掛かりとなるのが、その分野における使用語彙の調査であることを意味し、その成果が教育実践や言語支援において提供されることの意義が重要視されていることを示唆している。このことから筆者は、スポーツという新規分野における専門日本語教育の視点に立ち、まずは同分野における語彙研究を嚆矢とするのが妥当だと考える。しかし、一方で、大掛かりなコーパス調査をすることには莫大なデータの収集と分析を経なければならず多大な時間と労力を要するため、まずはラグビーに関する題材を取り上げ、語彙の特徴を俯瞰的にみることから始めた。

2.2 語彙リスト作成のプロセス

語彙リスト作成活動は、2019 年秋学期の外国語学部開講科目および 2020 年秋学期の全学共通教育日本語科目において行った。語彙リスト作成においては、題材の選定から留学生の協働という形を採用し、授業活動のなかで行うこととした。これは、上述した学習者中心の活動を軸とした授業が、外国人スポーツ留学生の日本語学習の動機づけにどのように有効かをみるためでもある。主な活動の内容は表 1 のとおりである。なお、2020 年度秋学期については、授業の一部として行ったため、活動期間は限定的である。学習者 (履修生) は、いずれもラグビー部に所属する外国人スポーツ留学生である (2019 年秋学期; 1 名 (ニュー

ジーランド出身)、2020 年秋学期; 3 名 (トンガ出身 2 名、ニュージーランド出身 1 名))。学習者は全員高校入学時に日本に來日し生活レベルの日本語には不自由はなく、したがって本授業はすべて日本語で行った。

表 1. 活動概要

活動時期	活動内容
2019 年秋学期	<ul style="list-style-type: none"> ・題材の決定 (学習者+教師) ・語彙の抽出 (教師による前作業) ・語彙の英語訳の付記 (学習者) ・確認作業と修正 (学習者+教師)
2020 年秋学期	<ul style="list-style-type: none"> ・語彙のトンガ語訳 ・タスクによる活動

【題材の選定】

2019 年秋学期、初回の授業において学習者と話し合いの機会をもち、教員からいくつかの教材と授業方法の提案をした。学習者からはラグビー解説書的なものではなくタイムリーで話題性に富んだものが示唆された。複数の題材の試し読みと話し合いの結果、選定した題材は、日本ラグビーフットボール協会 (JRFU) が会員向けに定期発行する会報誌『JAPAN! JAPAN!』である。当会誌には、直近の国際試合なども含めたタイムリーな話題と、ラグビージャーナリスト等による試合の分析、選手へのインタビュー、対談などもあり、戦術、試合の分析、選手としての意識、といった内容が多角的に盛り込まれている。また、生の教材という特質上、一般的な日本語教育のレベル基準では難易度が高い語が多く現れることが予想できたため、自律的な語彙学習をすすめていくためには、学習者がある程度知識として持っている内容を選定することも重要だと考えた。これは、スキーマ (福田 2021: 135) の活性化を図る狙いもあった。さらに、競技に関する内容であるため教師の知識よりも学習者の知識のほうが豊富であり、授業を進めるにあたってはより対等な立場で作業が行え、学習者の主体的な活動の参加や自律学習の促進への効果も期待できた。以下、選定した題材の概要である。

題材 1: 『JAPAN! JAPAN! No.80』2019 年 9 月号 RWC2019 日本代表最終登録メンバー発表記者会見

ジェイミー・ジョセフヘッドコーチ (以下、ジョセフ HC) が、日本代表の HC に就任後の 3 年間のなかでどのようなことにチャレンジし、取り組み、強化してきたか、またどのような理由、選考

基準によって代表メンバーを選出したのか、自身が考える日本代表の強み、などについて述べた記者会見の概要が主な内容となっている。日本の大学で競技をする学習者にとって、RWC（ラグビーワールドカップ）2019の日本代表外国人選手の活躍は、興味・関心を引くものであった。かつジョセフ HC の発話の内容は、チームが世界トップレベルになるための指導者としての取り組み、選手の選考基準などが記述されており、学習者にとっても興味深いものであった。また、ジョセフ HC と学習者が同じ出身国で英語母語話者であることから、ラグビーに関する知識だけでなく、言語的知識、文化的背景的知識を使ったトップダウン処理による文章理解が期待できた。

題材 2：『JAPAN！ JAPAN！ No.78』2019年3月号 サンウルブズレポート

参戦した試合（5戦）の結果報告と概要をレポートしている。ラグビージャーナリストによる勝因や敗因の分析と、試合の印象、試合運びなどが主な内容である。具体的なプレーに関する表現、試合からみえた課題や評価などの記述が多くみられ、競技者にとって比較的ニーズの高い語彙が出現していると考えた。

題材 3：『JAPAN！ JAPAN！ No.78』2019年3月号 スペシャルインタビュー 「リーチ・マイケル」

ラグビー日本代表のキャプテンであるリーチ・マイケルへの独占インタビューである。キャプテンから見たチームの特徴、開幕戦に向けての準備状態、開幕までの時間の過ごし方、対戦への心構え、世界のレベルからみた日本ラグビーの強み、などが主な内容である。選手としての取り組み、試合への意気込みなどが述べられており、学習者の日本語使用場面においてニーズが高い語彙が抽出できると考えた。

【語彙の抽出】

まず、本文をテキストデータ化し、計量テキスト分析ソフト KH Coder (ver.3.0) によって品詞ごとに語を抽出した。それぞれの題材で抽出した総抽出語数および異なり語数は表 2 の通りである。なお、KH Coder では、分析対象として扱わない助詞などを省いた数字が「使用（語彙数）」と

表 2. 抽出語数とリスト化語数

題材 / 語数	総抽出語数(使用)	異なり語数(使用)	リストへの抽出語数
題材 1	2470 (938)	589 (442)	108
題材 2	580 (245)	261 (185)	56
題材 3	2030 (753)	490 (357)	47

して表記されている。

次に、それぞれの題材において頻出語リストを作成した。さらに頻出語リストから、教師が今回の活動で扱う語彙の抽出作業を行った。その結果、表 2 の「リストへの抽出語数」にある計 211 語が対象語となった。

語彙の抽出にあたっては、いわゆる一般的な難易度とは関係なく、ラグビーあるいはスポーツ特有の語や表現、一般的な使われ方とは異なる表現、出現回数が比較的多い語を選定した。なお、一般的な語（「思う」「言う」など）や人名および場所の名称などの固有名詞は基本的に取り上げなかった。競技上のポジション名やルール、試合における競技特有の状況を表すような語については、言語間の相違をみるため、対象語とした。

【英語訳・トンガ語訳の付記】

2019年秋学期：あらかじめ抽出した語彙のリストには、その語の例文をできるだけ本文での文脈や語彙の前後の表現を変えないようにして提示した。授業では、それをもとに本文の内容と語彙の意味を確認していった上で、単語の英語（英語訳）を学習者がパソコン上で入力した。単語リストの英語付記は随時読解作業とともに行っていったが、授業中にできない部分は宿題とし、次の授業の中で確認作業をして、必要に応じて英語を修正していく、といった流れで行った。

2020年秋学期：2019年度に作成した英語のリストに加え、トンガ語訳を付記する作業を行った。学習者のうち一人は英語母語話者ではあるがトンガにルーツを持ち、英語とトンガ語が話せた。授業のなかでは、まず、リストの語彙について日本語と英語訳の理解を確認し、日本語の例文の意味や文脈を教師と確認しながら語彙のトンガ語訳を行った。トンガ語訳は、履修生で議論し一致した語彙を一人がリストに記入していく形で進めた。

3. 結果と考察

ここでは、日本語・英語・トンガ語の語彙リスト作成において明らかになった語彙の言語的特徴について述べる。さらに、語彙の意味的な分類を試み、今後の研究の方向性について述べる。なお、以下のトンガ語訳は、トンガ人留学生による表記をさらにトンガ語母語話者（元留学生の現競技者）にもチェックをしてもらったものである。

3.1 日本語・英語・トンガ語の比較

①英語が日本語に借用されているもの
フロントロー (front row)、スクラム (scrum)、

ディフェンス (defense)、バックス (backs)、トライ (try)、ゴール (goal)、リーダーシップ (leadership)、ポジション (position)、トレーニング (training)、フィットネス (fitness)、アンストラクチャー (unstructured) 等

スポーツ全般で用いられるであろう「トレーニング」「ポジション」「リーダーシップ」といった語や、「スクラム」「トライ」「バックス」「ゴール」「アンストラクチャー」といったラグビーという競技特有の語彙 (ポジションやルール、競技中の状況に関する語彙) に多く見られた。

②英語と日本語が異なるもの

スキルアップ (skill level up)、ノーサイド (full time) 等

「ノーサイド」という言葉は、ラグビーの試合終了を指す言葉として一般的に知られている。日本のポップスのタイトルやテレビドラマのタイトルなどにも使われるほど日本人にとっては身近な言葉であるが、英語母語話者である学習者によると英語では full time を使うほうが一般的だということである。

③英語がトンガ語に借用されているもの

(): 英語 []: トンガ語

攻撃 (attack) [ateki]、スクラム (scrum) [sikalamu]、ディフェンス (defense) [tifeni]、フィットネス (fitness) [fitinesi] 等

④日本語では英語を借用するが、トンガ語では借用しないものの例

ポジション (position) [tuunga]、トレーニング (training) [fakamalohisino]、フロントロー (front low) [otumua]、ヘッドコーチ (head coach) [faiako pule]、シーズン (season)

[feauhi fakatau]、メンタル (mental) [loto]、トライ (try) [tata'o]、ミス (miss) [fehalaaki] 等

「メンタル」のように日本語でも「精神面の強化」などと日本語 (漢語語彙) も併用する語もあるが、ポジションや競技のルールなどは、英語をそのまま借用していることが多い。一方、トンガ語には独自の語彙をもつものが日本語よりも多い傾向がうかがえた。学習者によると、上記のものは英語との併用もするが、語によってはむしろトンガ語を用いるものがある、ということである。

⑤英語にはあるがトンガ語にはないもの

自信 (confidence) [/]

日本語ではスポーツ分野に限らず、「自信をもって頑張れ!」「勝つ自信があります」など、学校や部活でも頻繁に使用する言葉であるが、複数のトンガ語母語話者にも確認したところ、この言葉の対訳はトンガ語にはないそうである。ある学習者

によると、来日当初はよく見聞きするこの言葉の意味がまったくわからなかったという。

3.2 その他の特徴

①コロケーション (共起関係)

スポーツ語彙特有のコロケーション (共起関係) がみられた例を以下に挙げる。

「試合を運ぶ」「展開が早い」「プレッシャーをかける」「互角に戦う」「(ゲームを) 読む」等

②理解が難しかった語彙

「チームカルチャー」³⁾ という語は、比較的新しい概念を指す語のようでありどの学習者も理解ができない語であった。使用範囲は限定的であるかもしれないが、RWC2019を機にメディアを通して聞かれるようになった語でもあり、今後は新しいラグビー用語として定着していく可能性もある。

3.3 意味的分類と使用場面

今回の一連の作業により、語彙の意味的な種別は大きく以下のように分類できた。

(1) 競技特有のルールやポジション、プレーに関する語

(2) 競技特有の戦術や理論に関する語

(3) スポーツ全般に出現すると思われる語

以下、それぞれについて詳述し、今後の語彙研究および教育実践への可能性について示唆する。

(1)は、「スタンドオフ」「フロントロー」「セットプレー」「トライ」「スクラム」などに代表される語である。これらは上記にみたように、英語から借用されて日本語やトンガ語となっている語も多い。他の言語については今回調査していないが、ラグビーがイングランドを発祥としたスポーツであることから、他の言語においても英語がそのまま使用されているケースが多いことが予想できる。これらは、プレーやルールに直結する語であることから、様々な場面において用いられその使用範囲は広い。英語母語話者以外の留学生にとっても重要度が高くかつ世界で共通して用いられているものであるため習得が容易な語であると言える。

(2)は、「プレッシャーをかける」「押し込む」「アンストラクチャー」「猛プッシュ」などに代表される。これらの語が用いられる文脈を詳細にみることで、ラグビーに特有の文脈があることがわかる。今回、KH CoderのKWICコンコーダンスで前後の文脈をみたところ、これらの語彙は以下のような文脈で出現していた。

例1: スクラムで押し込まれ、10 - 45 という

大敗を喫した。

例 2：ロシア、アイルランド、サモア、スコットランドは間違いなくスクラムでプレッシャーをかけてくるでしょう。

例 3：この 3 年、組み立ててきた戦い方は、スピードの速い展開とアンストラクチャーの中で強みを発揮するというスタイルです。

例 4：猛プッシュで反則を誘うシーンもあった。

(2)に挙げたような語はおそらく他の競技でも用いられると考えられるが、競技によって異なったコロケーションやそれらが使用される特有の文脈、状況があると思われ、今後の語彙研究においては、広く用例を集め、汎用的な使い方と競技特有の使い方の双方をみていく必要がある。

外国人スポーツ留学生が学ぶスポーツ分野における専門語彙としては、第一義的には(3)になるであろう。(3)にはまず、「フィットネス」「仕上げ」「戦術」「展開」「対戦」「攻撃」「反則」「(ゲームを) 運ぶ」「繰り広げる」といった一定の競技に共

通して使用される語がある。たとえば、「繰り広げる」は、今回の調査では「戦いを繰り広げる」「接戦を繰り広げる」という表現で、「展開」は「日本代表の早い展開」「スピードの速い展開」といった表現で出現しており、これらは他の競技においても同様の使用例があると思われる。また、「フィットネス」という語は、元来は体力という意味であったものが、現在では「健康の維持・増進」を目指して行う運動のことも指すようになり、具体的には、運動機能の向上・怪我の予防や運動能力向上のためのウォームアップや次に行う運動のための準備運動を目的として行われる運動のことを言う(厚生労働省)。しかし、本文中では「フィットネスを鍛え上げる」「フィットネスを上げる」といった使い方出現しており、ラグビー競技でいうところの「フィットネス」とは、持久力や走力等を含めたプレーに必要な身体的能力を指すようである。

例 5：(「残された時間で、個人としては何を伸ばしたいですか」、と聞かれ) あとは

表 3. 語彙リスト (136 語)

1	選手	31	ベストを尽くす	61	バックアップメンバー	91	過去	121	試合経験
2	(選手を) 外す	32	負傷者	62	控える	92	対戦する	122	積む
3	(選手を) 入れ替える	33	フロントロー	63	強み	93	立ち上がり	123	務める
4	代表選手	34	ポジション	64	惜敗	94	攻勢	124	仕上げ
5	合宿	35	戦い方	65	素早い	95	攻撃	125	シーズン
6	(~を) 耐え抜く	36	決断	66	トライ	96	連続	126	自主トレーニング
7	活躍する	37	(早い) 展開	67	スタンドオフ	97	右コーナー	127	リーダーシップ
8	ヘッドコーチ	38	終盤	68	プレースキック	98	角度	128	バックボーン
9	就任する	39	方向性	69	タフな	99	精度	129	フィットネス
10	引き継ぐ	40	(ゲームを) 読む	70	繰り広げる	100	守る	130	チーム力
11	活用する	41	(~を) 通じて	71	開幕戦	101	失点	131	(~を) 高める
12	育成	42	実力	72	押し込む	102	最小限	132	コンディション
13	心身ともに	43	役割	73	修正する	103	切り返す	133	進出する
14	強豪国	44	遂行する	74	初戦	104	攻める	134	手ごたえ
15	強化	45	スクラム	75	接戦	105	奪う	135	セットプレー
16	メンタル	46	プレッシャーをかける	76	観衆	106	しのぐ	136	圧力
17	コーチ陣	47	互角に戦う	77	沸かす	107	初勝利		
18	意思疎通	48	プレーの運び方	78	猛プッシュ	108	(勝利を) あげる		
19	連携	49	ディフェンス	79	反則	109	PG		
20	チームカルチャー	50	勝機	80	誘う	110	先制する		
21	積極的	51	(目的を) 達成する	81	互いに	111	主導権		
22	犠牲にする	52	(ゲームを) 運ぶ	82	譲る	112	握る		
23	献身的	53	徹底する	83	点差	113	規律		
24	負荷	54	スキルアップ	84	リードする	114	犯す		
25	課題	55	ストラクチャー	85	ノーサイド	115	ミス		
26	克服する	56	アンストラクチャー	86	間際	116	連鎖		
27	自信	57	状況	87	ゴール	117	全力		
28	自己ベスト	58	手こずる	88	外れる	118	○勝○敗		
29	目標	59	トレーニング	89	遠征する	119	戦術		
30	~につなげる	60	プレーする	90	優勝経験	120	浸透		

フィットネスを上げるだけです。

一方、(3)には同時に「目標」「ベストを尽くす」「課題」「達成する」「読む」「高める」といった一般的にも広く使用されるような語もある。このような一般的な語彙についてもスポーツ分野もしくはラグビーという特定の競技特有の意味を有すると思われるものや、特定の場面で用いられる例が散見された。たとえば、「高める」という語は、今回の調査では「想いを高める」「気持ちを高める」「スタンダードを高める」といった形で限定的に表れており、主に「試合に向けての意気込み」「試合への準備状況」について語る場面において使用されていた。

例6：いい感じでチームは上がってきていると思いますが、試合への想いをもっと高めたいです。

また、「運ぶ」について出現した2例は、「プレーを運ぶ」「ゲームを運ぶ」といった類似の表現で出現していた。

例7：勝つためにどのようにゲームを運ぶか。

今回、日本語・英語・トンガ語でのラグビー語彙リスト作成の試みは、時間的な関係から用意していた211語すべてを遂行することができなかった。作成できたのは表3にある136語である（うち、トンガ語訳付きは80語）。このリストのなかで、とくに、学習者にとって重要度が高いと思われる語にチェックを入れる形で選定してもらった。その結果、2020年履修生の3人中2人以上が選んだのが網掛けの番号にあたる語である。とくに3人全員が選んだ語は、「目標」「ポジション」「スクラム」「勝機」「ゲームを運ぶ」「トレーニング」「控える」「トライ」「開幕戦」「押し込む」「ゴール」「攻撃」「攻める」「初勝利」「フィットネス」であった。これらは学習者からみた学習ニーズの高い語として捉えることができる。

3.4 学習者の主体的な学びという観点から

今回、学習者自身が語彙リストの対訳を作成するという作業を通して、学生自身にも日本語に対する新たな気づきがみられた。とくに(2)や(3)にみられるような語については、学習者が初めて目にする未知語であるものが多かった。たとえば、「目標」という語を「日本語では初めて聞いた」、「大事な言葉だと認識しているが自身がこの語を用いて話したことはない」という声や、「直す」は知っていても、スポーツ用語として多用される「修正する」は知らなかったという声があった。どちらもスタンダードな日本語教育では早い段階から提出される語ではある。しかし、外国人スポーツ留

学生は一般的な日本語教育（JGP）を十分に受けてきていないケースもあることから、今後は、このような語を一般的な使い方とともにスポーツ特有の文脈や類義語があることも提示していく必要がある。

今回、題材の選定から語彙リストの作成までの工程においては、学習者が中心となり、協働することを重視した。2020年秋学期は時間の関係もありトンガ語訳が付記できたのは80語にとどまったが、その要因の一つは、トンガ語の辞書やネット上に検索するに足る十分なツールがなかった（あるいは見つけられなかった）ことである。一つの単語について学生間で主体的に議論し、答えを導き出すには非常な時間がかかり、しかも議論の結果、「こたえ」にたどり着けないことも多々あった。教師はラグビーについての十分な知識もトンガ語の知識ももたないため、日本語の意味や例文のインプット、ときには動画などを用いたインプットをしたのみで、学習者自身が主体的に考えるしかない状況が生じていたのも事実である。今後の教育実践においては、このような教師—学習者間、学習者—学習者間の情報量のギャップをうまく活用したタスク活動を授業に取り入れることが主体的な学びにつながる方法ではないかと考える。

4. 教育的アプローチへの示唆： タスクを活用した授業の展開に向けて

次に、近年、英語教育を中心に広く実践されているタスク・ベースの授業について、その教授法理論を概観する。そして2020年度秋学期に行った学習語彙をリソースとしたタスクによる活動の一部を紹介し、タスク・ベースの言語指導を取り入れた授業の導入についての見解を述べる。

4.1 タスク・ベースの教授法とフォーカス・オン・フォーム

従来の日本語教授法においては、文型の定着を図るためのコミュニカティブな活動の一つとしてタスク練習を取り入れることが多かったのに対し、最近では、第二言語習得（SLA）理論の研究の実証にもとづいた心理言語学的プロセスに考慮した教授法として、とくに英語教育において、タスク・ベースの教授法（以下、TBLT: Task-based Language Teaching）やフォーカス・オン・フォームという考え方にもとづく学習理論が取り上げられている。

では、ここでいうタスクとは何か。タスクにつ

いて、複数の研究者によってさまざまな定義づけが行われている。ELLIS (2003: 23) は、9人の研究者のタスクの定義をまとめた上で、自身のタスクについて、6つの基準を提示している。それらは「作業的計画であること」「意味に重点が置かれること」「実生活における言語使用に関わっていること」「4技能に関係していること」「認知的プロセスに関与していること」「結果を伴うこと」ということにまとめられる。一方、LONG (2015: 7) は、タスクを日常生活で行う現実世界での活動であると定義し、現実の行為に基づかないタスクは認めていない。この「現実性」という点については様々な議論があり、タスクへの取り組みにおける主体的判断の有無を重要視する見方もある(松村 2019: 17)。たとえば、「無人島に持っていくものを決める」という一見現実性を伴わないタスクであっても、旅行に持っていくものを選ぶ、という現実の行為と関連づけると、広義の「現実性」をもつものとなる、というものである。複数の研究者によって定義されている「タスク」における共通項は「意味に重点を置いて言語を使用すること」でありかつ「(コミュニケーション上の) 目的を達成する」ことであると言える。そして、タスクには、大きく分けて「目標タスク: target task」と「教育用タスク: pedagogic task」があり、目標タスクとは、学習者が現実場面で行う必要のある事項であり、教育用タスクとは、それを達成するための教育上設定するタスクである。

松村 (2019) は、LONG (2015) を引用した上で、「学校外で職業に就いている学習者が、業務を第二言語を用いて遂行する必要に迫られているのなら、まさにその任務の内容が目標タスクになる」とし、教育用タスクは、その目標タスクを達成するために、単純なものから複雑なものへと段階的に組み立てていくことが効果的であるとしている。この、タスクを軸にした教授方法が、TBLTである。松村 (2019) によると、「タスク・ベース」(task-based) とは、「個々の活動から1回の授業、月間・年間のシラバス、プログラム構成、到達目標の設定に至るまでのすべて」において、「学習者がどのような行為をできるようにする」といいか、「そのためにどのような課題を設定することが適切か」という観点から構想されるものであるとし、そこには従来の文法積み上げ式の授業にみられる文法的な目標の提示はなされないのが通常である。その意味で、TBLT はしばしば「文法ベース (grammar-based)」の PPP 型授業 (授業進行のスタイルが、Presentation (文法や語法の提示) -Practice (練習) -Production (目標事項を用いた

コミュニケーション活動) で成り立つもの) における言語指導と対比される。すなわち TBLT では、「タスク」の達成を第一義とし、言葉 (文法や語法) はあくまでもその活動を達成するためのツールであると考え、重要視されないのが特徴である。TBLT におけるタスクの記述は、近年、日本語教育分野においても言語能力を測る基準として用いられるようになった Can-do statement (「私は～することができる」という指標を用いた能力記述) に通ずるものである。

フォーカス・オン・フォームは、LONG (1991: 45-46) において提唱された言語指導における概念で、以下のように定義されている。

Whereas the content of lessons with a focus on form is the forms themselves, syllabus with a focus on form teaches something else – biology, mathematics, workshop practice, automobile repair, the geography of a country where the foreign language is spoken, the cultures of its speakers, and so on – and overtly draw students' attention to linguistic elements as they arise incidentally in lessons whose overriding focus is on meaning, or communication.

Focus on Form をともなうシラバスは、その他のこと——生物学、数学、作業の練習、車の修理、外国が話されている国の地理、文化等——を教え、意味やコミュニケーションへの焦点を優先したレッスンで、必要が生じた際に、偶発的に学習者の注意を明確に言語要素へ向けるものである (小柳 2021: 138)

つまり、フォーカス・オン・フォームは目標言語以外のことを教えている際、意味やコミュニケーションを重視した練習において、偶発的に学習者の注意が言語に向けられるようにするアプローチであると要約でき、これは言語項目を単位として教えていく方法、すなわちオーディオ・リンガルや文法訳読法に代表される形式重視のアプローチ (focus on forms) とナチュラル・アプローチに代表される意味重視のアプローチ (focus on meaning) のいわば中間的な指導法として位置づけられ、注目されるようになったものである。小柳 (2021) は、フォーカス・オン・フォームによる指導は、「意味のある伝達活動に従事していること」を大前提に、「適宜言語形式に注意を向けるように、教師もしくは教材により操作すること」だとしている。そしてさらに、教師の言語的介入は、「自然で、認知のプロセスを阻害しない」ものであるべきで、かつ、教師は「ある言語形式が使われる自然な状況」を創出する工夫をしなければなら

ないとしている。したがって、コミュニケーション上の目的を達成するために、意味に重点を置いて言語を使用することを目指した TBLT、すなわちタスク・ベースの言語指導においては、学習者の自発的な言語使用の中で必要に応じて言語形式に注意を向けさせるフォーカス・オン・フォームが文法に関する主な指導方法となりやすいのだと言える。

4.2 スポーツ分野における TBLT の導入

英語教育においては、学校教育や大学における英語授業での実践のほか、スポーツの分野においても日本から海外へのスポーツ留学や国際的に活躍できるスポーツ通訳の養成のための英語プログラムなどが開発され、ESP (English for Specific Purposes: 特定目的の英語) の領域において TBLT 理論を援用したスポーツ留学を目指した日本人への英語教育が実践されている。西条 (2021) は、将来、海外でサッカーの選手や指導者になることを目指す日本人学生と社会人を対象に、「ジャンル準拠タスク」を用いた英語教授法によるサッカーのトレーニング指導を実践し、参加者の発話内容の分析とインタビュー調査から英語によるコミュニケーション能力の変容を分析している。その結果、参加者たちは分野に特化した語彙・文法やジャンル構造への認識を深め、タスクパフォーマンス・テストに応用したことを明らかにしている。

筆者は、外国人スポーツ留学生への日本語教育の一方法として、TBLT 理論に基づくアプローチやフォーカス・オン・フォームの指導を取り入れることが有効ではないかと考える。なぜなら、学習者は、教室外において競技生活という共通の生活基盤を有し、かつ卒業後の進路においてもある程度共通した目標があると考えられ、ニーズに基づいたシラバス構築が比較的しやすいからである。つまり、LONG (2015) で言うところの、現実世界に即したタスクの設定や、松村 (2019) で言うところの広義の現実性に即したタスクの設定が可能となる。また、もう一つの理由は、外国人スポーツ留学生の日本語クラスが、学習者の日本語学習のバックグラウンドや日本語の習得状況がさまざまな学生によって構成されていることである。よって、文法積み上げ式の言語形式重視のシラバスや教育アプローチよりも、意味の伝達を重視したタスク・ベースのアプローチや、フォーカス・オン・フォームを取り入れた指導法がより現実的ではないかと考える。

4.3 授業でのタスク・ベースの指導の試みとその考察

上記を踏まえ、2020 年秋学期では、語彙学習と連動させたタスクを設定し、授業内での活動を試みた。具体的には、上記にみた語彙の使用場面を教師の客観的ニーズに基づいて、「(友人に) 自身のポジションの役割について説明する」「(インタビューで) 今シーズンの試合を振り返る」「(試合後のインタビューで) 自身があげた得点プレーを振り返る」をタスクとして設定した活動を実施した。次に、その一部を紹介する。

タスク 1 「ポジションの役割を説明する」

A: あなたの ポジション はどこですか?

B: () です。

A: ナンバーは?

B: () です。

A: 試合でどんな 役割 (やくわり: role) がありますか?

B: (*****)

ラグビーの試合を初めて観に来る日本人の友人に自分のポジションと役割を説明する、というタスクである。学習者には上記の提示文とあわせポジションの図式のイラストを提示したプリントを配布し、場面の状況とタスクの内容を説明したあと、(****) の部分を、自由に話すことを指示した。その際、とくに文法や語彙・表現の指定はせず、「役割をわかりやすく説明する」ことだけを指示し、自由に日本語をアウトプットさせた。なお、学習者がこたえている間は、語彙や文法的な間違いは訂正せず、やりとりが一通り終わったあとで、パソコンで打った学習者の表出文を提示しながら「どこがうまくいったか」「言いたいことが十分に言えたか」といった振り返りの時間を設けた。そして、表現や文法について、助詞の間違いや活用の間違いなど、最小限の修正を加えた形で、学習者のアウトプットの情報を再生し、文にして提示した。以下が、学習者が実際に表出した文に教師が修正を加えた文である。

X さんの表出文: 自分の足の速さを使って相手のディフェンスラインをこえることです。そして、ボールを持って、相手のトライラインにはこびます。

Z さんの表出文: 自分の背の高さでラインアウトをするときに、ボールをもらうことです。

この際、学習者はスライド上に示された修正文をプリントに書く姿がみられ、一定の言語形式への意識があったものと思われる。一方でタスクの設定への課題もみられた。それは、聞き手が競技のポジショニングの概要や得点方法といったその

競技についての一般的な知識を有していないと学習者のこたえだけでは理解が難しく、よって話し手にはより丁寧な説明が求められるのであるが、その指示が曖昧だったことである。結果、学習者にとっては自明である「トライ」や「ラインアウト」という言葉がそのまま出現されていた。今後の指導方法として、ポジショニングの概要や基本的なルールを説明し、そのなかで自身のポジションについて説明するといった段階的なタスクを設定することも必要ではないかと思われた。

タスク2:「今シーズンの試合を振り返る」

A: あなたにとって今シーズン、いちばんタフな戦い(たたかい:game)は、どの試合(しあい)でしたか? それはなぜですか?

B: 私にとって、いちばんタフな戦いは、()戦でした。(***** ***)

ここでは、「今シーズンでもっともタフな試合」を挙げ、内容を振り返る、というタスクを提示した。以下、学習者の表出文(修正後)である。

Xさんの表出文:

〇〇戦です。残念ですけど、自分たちの力を全部出し切ったのはよかったです。足りないところを、みんなで直して/修正(しゅうせい)して、また来年、練習をみんなでレベルアップしてがんばりたいと思います。

ここでは「タフだった理由」を(*****)で述べることを指示していたが、理由に関するアウトプットはみられなかった。一方で、チームとしてのベストを尽くせたこと、次のシーズンに向けての意気込みにも踏み込んだ内容のアウトプットがみられた。また、学習した「レベルアップ」「修正する」という語彙も、文脈のなかで適切に使用されていた。振り返りの際、別の学生YがXによって表出された「修正する」という言葉が瞬時には理解できない様子であったのを見て、Xが「直す」と言い換えた場面も見られた。

タスク3:「得点プレーを振り返る」

A: あのトライは、どうでしたか。

B: (***** ***)

Yさんの表出文:(タフなトライでしたが、毎日のウェイトトレーニングでできたと思います。)

学習者は、こちらから指示は出さずとも授業で学習した「タフ」ということばを表出していた。得点シーンの具体的な状況などが表出されることを期待したが、得点プレーについて自身が分析した要因が言及されていた。こういった学習者自身の表出文にこそ、学習者ニーズを知る上におけるヒントがあると言える。

5. まとめと今後の課題

本研究では、大学で学ぶ外国人スポーツ留学生の日本語教育実践へ向けた取り組みとして、授業においてラグビー情報誌を題材とした語彙リスト作成(英語とトンガ語訳つき)を行い、その言語的特徴と意味的特徴について検証した。ここでは、本稿のまとめと、外国人スポーツ留学生への日本語教育の研究と実践の方向性について、筆者の見解を述べる。

5.1 語彙研究から教育実践へ

まず、競技に関する語彙には、日本語とトンガ語には一定数の共通した英語からの借用語があることがわかった。このことより外国人スポーツ留学生が日本で競技活動を行うに際しては、ある程度共通の語彙を使用することが可能であることがうかがえた。しかし一方で、日本語には和製英語による語彙(「ノーサイド」)や、日本語では英語の借用語を用いるもののトンガ語ではトンガ語独自の表現を用いるものがあることがわかった(「メンタル」など)。また、競技生活においては頻繁に使われるであろう「自信」といった言葉が、トンガ語にはないこともわかった。このような母語にはない日本語語彙は他にもあることが推測できる。よって、外国人スポーツ留学生への専門日本語教育においては、母語により英語の借用の度合いが異なることや母語にはない日本語語彙があることを前提とした教育実践をしていく必要があり、そのためにはさらに詳しくスポーツ分野の語彙調査を行っていく必要がある。

また、本研究では、調査対象となった語彙について、意味的な特徴についても分類を試みた。その結果、スポーツ分野の語彙には、一定数の競技において共通して使用されるものもあれば、競技(ラグビー)特有の語彙の選択や意味用法を有していたり、特有のコロケーション(共起関係)があることが示唆された。

今回、ラグビーに限定した調査を実施したが、今後は、ラグビー以外のスポーツに調査対象を広げ、競技の違いによる語彙的特徴および意味的特徴についてもみていくことも必要である。

さらに、外国人スポーツ留学生にとって重要度の高い語彙とは何かを探るべく学習者自ら選定してもらった。その結果、試合の評価や戦術に関する語よりも、自身のプレーや選手としての意識に関する語の割合が高く抽出され、これらは学習者からみたニーズの高い語であると言えるが、今後は、さらに言語資料調査を行い、学習者ニーズと

客観的なニーズの双方からみていく必要がある。

次に、教育実践については、語彙学習と連動した TBLT 理論にもとづくタスク・ベースの授業実践の有効性が示唆された。今後は、主観的、客観的なニーズ調査から「学習者の特定のニーズ」を定め、それに基づいたタスクの設定を検討していくことが必要であろう。たとえば「高める」は試合への意気込みを語る場面では使用頻度が高い語であると思われ、それに応じた具体的なコミュニケーション場面を想定したタスクを設定し、適宜、言語形式を明示的もしくは暗示的に提示するようなアプローチを考えていくこともできる。さらに、教師—学習者間、学習者—学習者間の情報量のギャップやインターアクションを活用した活動を授業のなかで積極的に取り入れていくことは主体的な学びの醸成という点において効果的であると考える。

5.2 学修支援に向けて

教育実践とは別視点で、学修支援ということについて最後に述べておく。外国人スポーツ留学生は、日本語学習歴や習得状況がまちまちであるため、一般の留学生のクラスよりレベル差がありかつ学習時間の確保の問題があることは前述した。このような状況を鑑み、語彙学習をベースにした外国人スポーツ留学生のための日本語学習教材と自律的な学習のための学習支援方法は検討の余地がある。たとえば、一般的な学術語彙とあわせ、スポーツ分野の語彙（専門日本語）を学べる語彙教材化と、それらをベースにした e-learning 教材化もその一案であろう。

注

1) この事件は、バスケットボールの試合で留学生の選手が判定を不服として審判を殴打して負傷させたというものである。その時の動画は SNS でも拡散し、部活動での留学生批判が沸き起こった。結果、この留学生は自主退学、帰国を余儀なくされている。その事件の背景には、日本語が話せず、英語も片言であった上、彼の母国の公用語であるフランス語を話せる教員が前年度で退職して不在であったこと、入学してまもない 5 月末にホームシックとなり、練習を 1 週間ほど休んだ復帰直後の大会での出来事であったことがわかっており、受け入れ体制の整備も厳しく批判された（小林悠太・勝野昭龍・田原和宏 毎日新聞 2018）。

2) スポーツ庁が実施した『平成 30 年大学スポーツの振興に関するアンケート 調査結果概要 ～大学～』によると、「運動部活動に所属する学生に対

する学業支援・キャリア支援を行っているのは、回答した 519 大学のうち、32.3%（167 大学）であり、351 の大学が「支援をしていない」と答えている。さらに、支援の具体的な取り組みに関する質問では、「補講等公式試合等で授業を欠席した際の配慮」がもっとも多く（96 大学）、「運動部活動生用の就職セミナーの開催」（61 大学）、運動部活動生向けのプログラム編成や学修プログラムの提供（25 大学）、チューターや学修アドバイザー等の配慮（14 大学）、e-learning の提供（3 大学）となっている。この結果からも明らかのように、スポーツ学生を対象とした教育プログラムの提供をしている大学は 167 大学のうち 25 大学と、きわめて少ない数字となっている。

3) イングランド代表 HC を務めるエディ・ジョーンズ氏（元日本代表 HC）によると、「チームカルチャー」とは、「選手たちがプレーするオンフィールド、オフフィールドにおける環境」を指し、「カルチャー」とは「（仲間やファン、ゲームに対する）敬意」「常に正しい方向に導く規律」「自分のチームに合ったプレーをする勇氣」の三つの価値観（バリュー）の上に成り立つものであるとしている。

参考文献

- ELLIS, R. (2003) *Task-based Language Learning and Teaching*. Oxford: *Oxford University Press*
- 福田由紀編 (2021) 言語心理学入門第 6 版. 培風館, 東京: pp.127-151
- 池田智美 (2019) 大学スポーツにおける学修支援とキャリア支援: スポーツ留学生に着目して. 京都産業大学総合学術研究所所報 (14): pp.75-88
- 石井信輝 (2020) スポーツ活動と異文化間相互理解・不寛容除去. 摂南大学地域総合研究所報 (5): pp.83-93
- 小林悠太・勝野昭龍・田原和宏 (2018) 言葉通じず、上意下達の運動部 異文化悩む留学生 高校バスケットで審判殴打. 毎日新聞 6 月 29 日朝刊東京都版
- 厚生労働省. e-ヘルスネット健康用語辞典 <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/exercise/ys-078.html> (参照 2021.09.25)
- 小柳かおる (2021) 日本語教師のための新しい言語習得概論 (改訂版). スリーエーネットワーク, 東京
- LONG, M.H. (1991) Focus on Form: A Design Feature in Language Teaching Methodology. *Foreign Language Research in Cross-Cultural Perspective*: pp. 39-52
- LONG, M.H. (1997) Focus on Form in Task-Based Language Teaching. https://woucentral.weebly.com/uploads/7/4/6/9/7469707/long_1997_intro_

focus_on_form.pdf (参照 2021.09.24)

LONG, M.H. (2015) *Second Language Acquisition and Task-Based Language Teaching*. Wiley Blackwell

松元秀雄・高橋直人 (2009) 外国人スポーツ留学生の日本の大学への受け入れの現状と課題: ラグビー選手に着目して. 順天堂スポーツ健康科学研究 1(2): pp.214-224

三代純平 (2014a) 学習言語能力の「問題」は誰の問題か—スポーツ留学生Aのライフストーリーから— 徳山大学総合研究所紀要 (36): pp.89-103

三代純平 (2014b) セカンドキャリア形成へ向けた文化資本としての日本語 スポーツ留学生のライフストーリーから. 言語文化教育研究 12: pp.221-240

文部科学省スポーツ庁 平成 30 年大学スポーツの振興に関するアンケート調査結果概要 (大学) 確定値. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/___icsFiles/afielddfile/2018/05/10/1404336_001_1.pdf (参照 2021.09.25)

中川健司 (2019) 『専門日本語教育研究』の投稿論文はどのような専門日本語を扱ってきたか. ときわの杜論叢 (6): pp.31-39

西条正樹 (2021) 世界を目指すサッカー選手と指導者のための英語力向上プログラム実践報告. 日本教育工学会論文誌 44 (4): pp.469-482

佐野ひろみ (2009) 目的別日本語教育再考. 専門日本語教育研究 11: pp.9-14

The Rugby Site <https://therugbysite.jp/video-library/creating-team-culture/> (参照 2021.09.24)

In the class, we created a vocabulary list in English and Tongan from a rugby magazine as a learner-centered activity.

The findings of this activity suggest that there are words that are common to all sports, usages that are different from the general meanings, and words that are used in situations and contexts peculiar to competitions, in addition to the words borrowed from English.

This has clarified points to be focused on in the practice of JSP (Japanese for Specific Purposes) education.

Furthermore, for international students learning Japanese for the purpose of sports, in addition to the importance of identifying these learners' needs, it was found that task-based activities based on TBLT theory are effective.

KEYWORDS: Foreign sports students, JSP (Japanese for Specific Purposes), Rugby field vocabulary, Task-based teaching

2022 年 2 月 10 日受理

1 Faculty of Foreign Studies, Kyoto Sangyo University

A Study of Japanese language classes for foreign sports students —Creating a sports vocabulary list and practicing tasks—

Shio WATANABE¹

In recent years, with the globalization of sports, the number of foreign students studying abroad in Japan for the purpose of competitive activities is increasing. However, few practical research on Japanese language education and language support for foreign sports students has been conducted so far. This is a research note about the development of teaching materials and educational practices that will be part of the Japanese language support program for the foreign sports students.